



RIETI Discussion Paper Series 16-J-048

子育てのあり方と倫理観、幸福感、所得形成 —日本における実証研究—

西村 和雄
経済産業研究所

八木 匡
同志社大学



Research Institute of Economy, Trade & Industry, IAA

独立行政法人経済産業研究所

<http://www.rieti.go.jp/jp/>

子育てのあり方と倫理観、幸福感、所得形成 －日本における実証研究－

西村和雄（神戸大学／経済産業研究所）*
八木匡（同志社大学）**

要 旨

本稿の研究では、日本人が子供のころに受けた子育てについてのアンケート調査を行い、子育ての方法が子どもの将来に与える影響について分析した。我々は、子供時代の親との関係に関する20項目の質問の回答について主因子法による因子分析を行い、「関心」、「信頼」、「規範」、「自立」の4つを因子として抽出した。それに、親との「時間共有」経験、親の「厳しさ」の指標を加えた上で、子育ての方法を、支援型、厳格型（タイガー）、迎合型、放任型、虐待型、平均型に分類し、それぞれの子育てを受けたグループの平均所得、幸福感、学歴を比較した。6つの子育てタイプのなかでは、支援型が所得、幸福感、学歴いずれにおいても最も高い達成度を示しており、虐待型はすべてにおいて最も低い達成度となった。倫理観についても子育てタイプ別に比較を行ったが、あらゆる点で支援型は望ましい結果を示した。

キーワード：子育て、支援型、厳格型、タイガー・マザー、所得比較、倫理観、幸福感
JEL Classification Codes：I21, I26

RIETIディスカッション・ペーパーは、専門論文の形式でまとめられた研究成果を公開し、活発な議論を喚起することを目的としています。論文に述べられている見解は執筆者個人の責任で発表するものであり、所属する組織及び（独）経済産業研究所としての見解を示すものではありません。

本稿は、独立行政法人経済産業研究所におけるプロジェクト「日本経済の持続的成長のための基礎的研究」（代表：西村和雄ファカルティフェロー）の成果の一部である

* 神戸大学経済経営研究所教授

** 同志社大学経済学部教授

1. 序文

子育ては、子供にとっては、親との結びつきの在り方、そして、将来、社会とどう関係するかを決定する。子育ての方法が異なれば、子供の自尊感情、規範意識、自制心なども異なり、そして教育的効果も異なってくる。子育ての方法については、昔から、多くの議論が行われているが、子育てのタイプを分類した理論としては、アメリカの発達心理学者Diana Baumrind (1967,1968)によるものがよく知られている。Baumrindは、子育てのタイプを権威型 (Authoritative) 、専制型 (Authoritarian) 、迎合型 (Permissive) の3つに分けて分析した。その中で、最も効果的なのは、権威的な親であるとされた。権威的な親は子供に対して、ルールで管理し、要求も高いが、子供のもっともな要求には耳を傾ける民主的な面をもち、子供の自立を促すからである。その後、Maccoby and Martin(1983) はBaumrindの3つのタイプに、4つ目のタイプである放任型 (uninvolved) を加えた。

親の子育てのタイプが子供のパフォーマンスに与える影響に関する最近の研究として、親のもつ特質を、温かみ (warmth) , 論理的 (reasoning) , 観察的 (monitor) , 民主的 (democracy) の4つと、対立的 (hostility) , 支配的 (control) , 恥辱的 (shaming) , 懲罰的 (punitive) の4つの、合計8つを選んで、444の中国系アメリカ人家庭の調査をしたKim et al. (2013)によるものがある。Kim et al.は、子育てを、支援型 (Supportive) , 厳格型 (Tiger) 、放任型 (Easygoing) , 虐待型 (Harsh) の4タイプに分けた。厳格型をTigerとよぶのは、Chua (2011)が厳格な子育ては子供の成功に役立つとして、中国に多いと言われる子育てと西洋に多いと言われる子育て方法の比較をすることで問題提起をし、厳格な子育てをする中国人の母親をChua自身が"Tiger Mother"と呼んだからである。

その結果、こどもの学業成績、精神的な安定の面で、最も効果があったのは、支援型の子育てであった。その次が放任型、そして厳格型、もっとも効果がなかったのは虐待型の子育てであった。Kim et.al.が"Tiger Mother"と呼ばれる親による子育ての優位性を実証的に否定したことは興味深い。

なお、Kim et al. (2013)に先行して、子どもの育て方とその影響について、多くの研究蓄積が存在している。ここでは、本研究に関連した比較的最近の研究に焦点を絞り、子育てに関する研究の流れを簡単に整理する。Ge et al. (1996)は、どのような子育てが子どもの鬱症を引き起こしやすいかを分析し、親子間での信頼の崩壊が重要な要因であることを指摘した。Barber (1996)も、子どもに鬱症を生じさせる子育ての特徴を分析し、子どもに対する心理的制限と行動的制限が、鬱症および非行の重要な要因となることを明らかにした。Fulgini and Source (1999)は、家庭環境の異なったアメリカ人高校生を対象に、家族の一員である責任をどのような態度で果たしているかを調査し、家族との前向きな関係が構築できれば、学習効果も高いことを示した。

また、親の子育ての在り方は子供の規範意識の形成とも関係する。更に、信頼形成が経済活動の効率性を高めるという議論も、近年様々な問題に対して行われている(Zak, 2013)。我々も、西

村他(2014)において、モラルの高い労働者が労働市場において高い評価を受けていることを日本のデータによって示し、規範意識の形成が企業内での信頼関係を高め、生産性を高めていることの傍証を示した。

本稿では、1万人の日本のデータを用いて、日本人の親に多い子育てのタイプと子育ての成果との関係を分析する。具体的には、子育ての方法が子どもの人格形成とパフォーマンスに与える影響について、就業後の所得、幸福感、学歴、倫理規範にどのような影響を与えるかを明らかにした。

以下の第2章で、データと調査の概要を説明する。第3章では、主因子法を用いた因子分析によって親から受けた子育てと幸福感に関する因子を抽出する。第4章では子育てのタイプを、支援型、厳格型（タイガー）、迎合型、放任型、虐待型、平均型に分類して、それぞれの子育てタイプが、子供の所得、幸福感、学歴にどのような影響を与えるかを明らかにする。

2. 調査概要

本調査は、独立行政法人経済産業研究所のプロジェクト「日本経済の持続的成長のための基礎的研究」の一環として、楽天リサーチ株式会社を通じて行った「子育てと生活環境に関するWeb調査」である（2016年1月）。楽天リサーチの有する約230万人の母集団モニターの中から338,707人を無作為抽出し、回答を依頼した。最終的に、1万人からの回答を得ている。以下では、男女別に属性を中心に、主要変数について記述統計量および分布を示す。

まず、性別分布であるが、男女とも5000人の標本を得ている。記述統計は、表1で示された通りであり、男性の54.9%、女性の62.3%が既婚となっている。また、表2で示されるように、課税前平均世帯所得は男女間で差が無いが、税込み労働所得は男性よりも女性で大きく下回っていることが示されている。表3では、子どもの有無を示しており、男女共に標本の約半数が子どもを持っていることが示されている。表4では、標本の学歴分布を示しており、大卒以上の学歴を持つ者の比率は、男性で54.6%、女性で33.5%であることが示されている。

表1 婚姻状態 (%)

	男性	女性
未婚	38.8	27.5
既婚	54.9	62.3
離婚・死別	6.2	10.3
合計	100.0	100.0

表2 所得分布統計量

		年齢	世帯課税前収入 (男性) 単位万円	世帯課税前収入 (女性) 単位万円	税込み労働所得 (男性) 単位万円	税込み労働所得 (女性) 単位万円
人数	有効	5000	5000	5000	5000	5000
	欠損値	0	0	0	0	0
平均値		45.85	547.20	546.82	414.72	184.02
中央値		46.00	500.00	500.00	300.00	100.00
標準偏差		13.18	353.22	350.91	321.78	222.96
最小値		23	0	0	0	0
最大値		69	2100	2100	2100	2100

表3 子どもの有無 (%)

	男性	女性
子ども有り	49.8	54.9
子ども無し	50.2	45.1

表4 学歴 (%)

	男性パーセント	男性累積パーセント	女性パーセント	女性累積パーセント
中学校	2.3	2.3	1.7	1.7
高校	28.0	30.3	30.4	32.2
専門学校	9.8	40.1	12.7	44.9
短大・高専	5.3	45.4	21.6	66.5
大学	47.5	92.9	30.8	97.3
大学院	7.1	100.0	2.7	100.0
合計	100.0		100.0	

3. 親から受けた子育て

3.1 親の子育てを特徴付ける因子

本調査では、表5で示されている20項目の質問で子供時代の親との関係をたずね、それに対する回答の因子分析を主因子法によって行い、因子の抽出を行った。質問項目については、Armsden and Greenberg (1987)の研究を基礎に作成した。本調査では、各質問項目に対して、5段階のリッカートスケールで回答していただき、「まったくそう思わない」に1の点数を与え、「とてもそう思う」に5の点数を与えている。主因子法を用いた因子分析では、固有値が1以上となる因子を抽出しており、抽出された4つの因子と強い相関を持つ質問項目を見ることにより、因子の意味を解釈した。以下では第1因子を「無関心(関心)」、第2因子を「信頼」、第3因子を「規範」、

第4因子を「自立」と解釈した。「無関心」については、マイナスの係数値を持っている項目であれば、「関心」を表していると解釈できる。

表5では因子分析の結果を示している。関心は親が子供の状況を把握し、理解していること、信頼は親が子供を信頼し愛情をもつことである。規範は、親が「子供がやってはいけないこと」に対して、どれだけ明確にしていたかである。自立は子供がどれだけ自分自身で判断を下していたかである。

以上に加えて、「子どものころ、親や身近な大人に本を読んでもらった」、「子どものころ、親や身近な大人に勉強を教えてもらった」、「子どものころ、家族そろって遊びに行った」、「子どものころ、夕食を子どもだけで食べた」という質問から、「時間共有の経験」の因子を、そして、「子どものころ、親以外の身近な大人に叱られた」、「子どものころ、親にたたかれた」、「子どものころ、親に叱られた」という質問から「叱られた経験」という因子を得た。

以下では、関心、信頼、規範、自立の4つに、時間共有、叱られた経験の濃淡を加えた6つを子育てを特徴づける因子として用いる。

表5 子育て特徴に関する因子（クオーティマックス回転）

	無関心 (関心)	信頼	規範	自立
だれも私のこと理解していないと感じていた	-0.792	-0.146	0.052	-0.03
両親を頼って良いのかどうか分からなかった	-0.739	-0.149	-0.006	0.082
家族は私に関心がないと感じた	-0.728	-0.155	-0.058	-0.092
私は家で精神的に不安定になりやすかった	-0.702	0.05	0.054	-0.109
両親は私の様々な過去の経験について理解していなかった	-0.686	-0.195	0.105	0.09
私の問題を両親と話すことによって、私は恥ずかしい、もしくは愚かであると感じた	-0.382	0.215	0.077	0.047
両親が問題を抱えているとき、私は両親の問題にかかわろうとしなかった	-0.36	-0.059	0.041	0.127
私は心配事があれば、それに対する両親の見解を得たいと思った	0.254	0.638	-0.02	-0.126
両親は私が何か失敗したとき、察知した	0.279	0.631	0.045	0.008
私が何かついて悩んでいると察知した時には、両親はその点を私に尋ねた	0.308	0.604	0.019	-0.105
私は両親を信頼していた	0.548	0.492	0.018	0.247
両親は私を信頼していた	0.506	0.447	-0.012	0.37
両親は私の意見を尊重してくれた	0.466	0.441	-0.2	0.387
仕事、進学先などの選択には両親の助言に従った	-0.021	0.434	0.101	-0.231

両親は私に多くの期待をしていた	-0.014	0.361	0.134	0.119
両親は、私が言われたことを守らないと叱った	-0.084	0.094	0.842	0.041
両親は、私が口ごたえをすると叱った	-0.223	0.041	0.773	-0.053
両親は、私が悪いことをすると叱った	0.113	0.148	0.687	0.197
両親は、私が素直に従わないと叱った	-0.357	0.062	0.613	-0.122
私は解決すべき問題があるとき、自分自身で解決しようとした	-0.014	-0.072	0.072	0.52

3.2 幸福感を特徴付ける因子

次に、幸福感について見てみる。幸福感の分析方法としては、Hills. and Michael (2002)で提示された質問リストを用い、表6で示されるように、主因子法による因子分析によって「前向き思考 (positive thinking)」と「不安感 (安心感)」の2つの因子を抽出した。

表6 幸福感に関する因子分析

	前向き思考	不安感
物事に良い影響を与えられる	0.776	-0.176
大きな活力を持っている	0.756	-0.248
人生は素晴らしい	0.738	-0.294
いつも他人を元気づける	0.714	-0.083
ほとんどの事は楽しめる	0.713	-0.157
いつも熱心に取り組む	0.707	0.002
人生はとても実りがある	0.699	-0.245
物事の中から美しい部分を見つける	0.694	-0.042
何でも挑戦できると感じる	0.686	-0.164
自分はとても幸せだ	0.638	-0.365
よく笑う	0.623	-0.101
自分の人生にとっても満足している	0.619	-0.442
たいていの人に温かく接する	0.6	0.116
自分のやりたい事のために時間をつくれる	0.563	-0.04
決断をすることは難しいことではない	0.536	-0.096
精神的に機敏で注意を怠らない	0.466	0.059
たびたび気分が高まり上機嫌になる	0.441	0.105
他人にとっても関心がある	0.325	0.136
あまり自分の人生を思うようにコントロールできていない	-0.229	0.691
自分がしたい事と自分がしてきた事の間には差がある	-0.098	0.638
現状に必ずしも満足していない	-0.058	0.588
将来に対して楽観はしていない	-0.026	0.577

この世界が素晴らしい場所だとは思わない	-0.319	0.574
自分が魅力的だとは思わない	-0.319	0.562
人生に特別な目的や意義を感じない	-0.283	0.525
過去の幸せな記憶があまりない	-0.336	0.517
あまり健康的でない	-0.245	0.499
睡眠で疲れがとれない	-0.134	0.494
他人と一緒に遊ばない	-0.288	0.399

親と子との関係について、個々の因子の影響を独立に議論するのは、必ずしも的確ではない。例えば、親が子どもを叱る場合には、どのような状況でどのように叱るかによって、子どもの受け取り方は異なったものとなる。怒って感情的に叱るなら子供は自分の存在を否定されたと受け取る可能性がある。子供が危険な行動をした時に、親が危険な行動を諫めるために、冷静に叱るとしたら、子供は自分の行動が不適切であることを学習するであろう。子育てを正しくは評価するには、親がどのように子供に接していたか表す複数の因子を組み合わせなければならない。そこで、次節では、複数の因子の組み合わせ方により子育てタイプを定義して、それぞれのタイプの子育てを受けた回答者の所得、幸福感および倫理観を比較することにする。

4. 子育てのタイプと子どもの達成度

4.1 子育てタイプ

子供時代に親から受けた子育てを特徴付ける6つの因子（関心、信頼、規範、自立、時間共有、叱られた経験）について因子得点に関する四分位範囲をそれぞれ求め、カテゴリー変数に変換した。第1四分位までを第1カテゴリー（低経験）、第1四分位と第3四分位との間を第2カテゴリー（中経験）、第3四分位以上を第3カテゴリーとしている。なお、「叱られた経験」は経験の度合いが「厳しさ」を表すと考え、3段階を「厳しい」「やや厳しい」「全く厳しくない」と表現している。

本稿では、次の6つを子育てタイプとして分析する。支援型、厳格型、迎合型、放任型、虐待型の5つはこれまでの文献の中でも扱われていたものである。我々はこちらに対し、すべての因子が、中程度の評価である子育てのタイプを、平均型として加えている。6つの子育てタイプは、次のように定義される。

- 1) 支援型：高自立、中自立、高信頼、高関心、高共有時間
- 2) 厳格型（タイガー）：低自立、中・高信頼、厳しい・やや厳しい、中・高関心、高規範
- 3) 迎合型：高信頼、中信頼、全く厳しくない、高共有時間、中共有時間
- 4) 放任型：低関心、全く厳しくない、低共有時間、低規範
- 5) 虐待型：低関心、低自立、低信頼、厳しい
- 6) 平均型：すべて普通（中カテゴリー）

4.2 子育てタイプと所得

表7および図1では、男性有業者子育てタイプ別平均所得を示している。これらの図表が示すように、平均所得は支援型、厳格型、迎合型、平均型、放任型、虐待型の順になっている。迎合型と平均型はほぼ同じ所得水準であった。女性有業者についてはまた、表8および図2で示されているように、平均所得は支援型、厳格型、放任型、迎合型、虐待型、平均型の順になっている。男性、女性のいずれの場合でも、支援型が最も高い平均所得をもたらしている。

特に女性の場合には、既婚であるか未婚であるかで、稼得の必要性に違いがあるため、子育てタイプ別の所得が異なったパターンとなる可能性がある。この点をデータで確認したが、女性の放任型の数値を別にすれば、男女共に既婚者と未婚者との間で大きな傾向の違いは確認できなかった。

表7 男性有業者子育てタイプ別平均所得

男性有業者				
課税前労働所得				
	人数	平均所得 (万円)	標準偏差	標準誤差
支援型	141	529.7872	324.2012	27.30266
厳格型	106	501.8868	368.7769	35.81878
迎合型	523	449.9044	312.7173	13.67417
放任型	56	360.7143	280.051	37.42339
虐待型	33	312.1212	205.7875	35.823
平均型	163	448.4663	311.5782	24.40469
合計	1022	456.7515	318.6167	9.96651

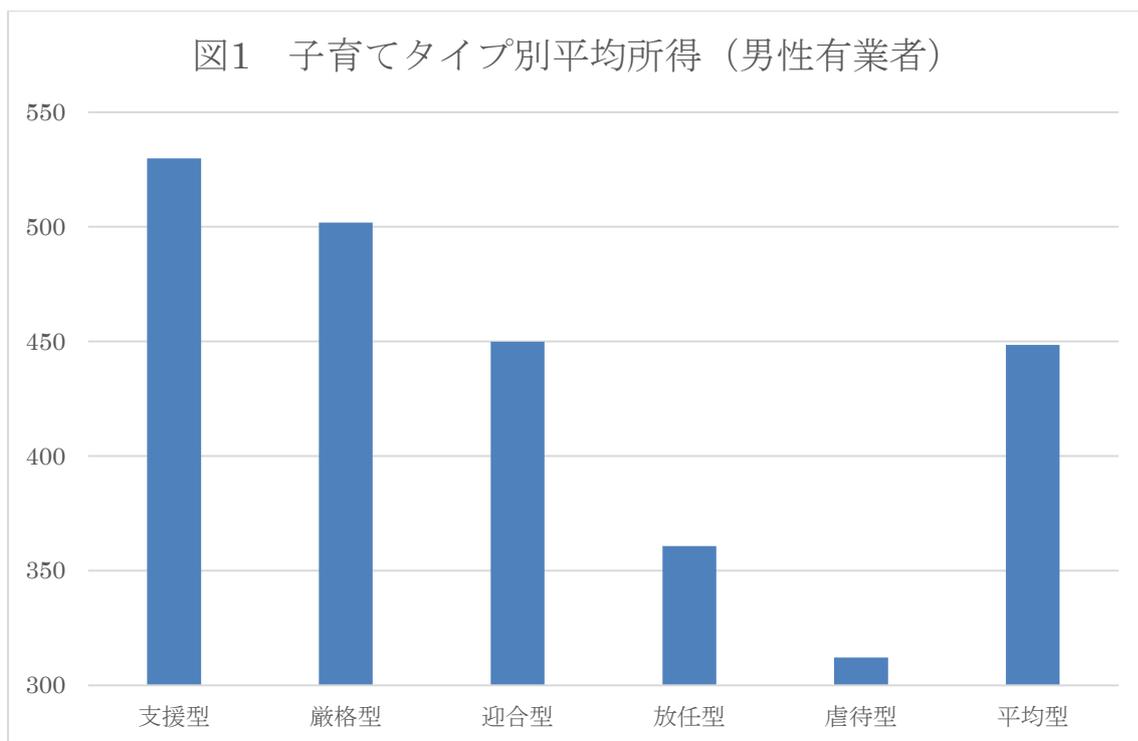
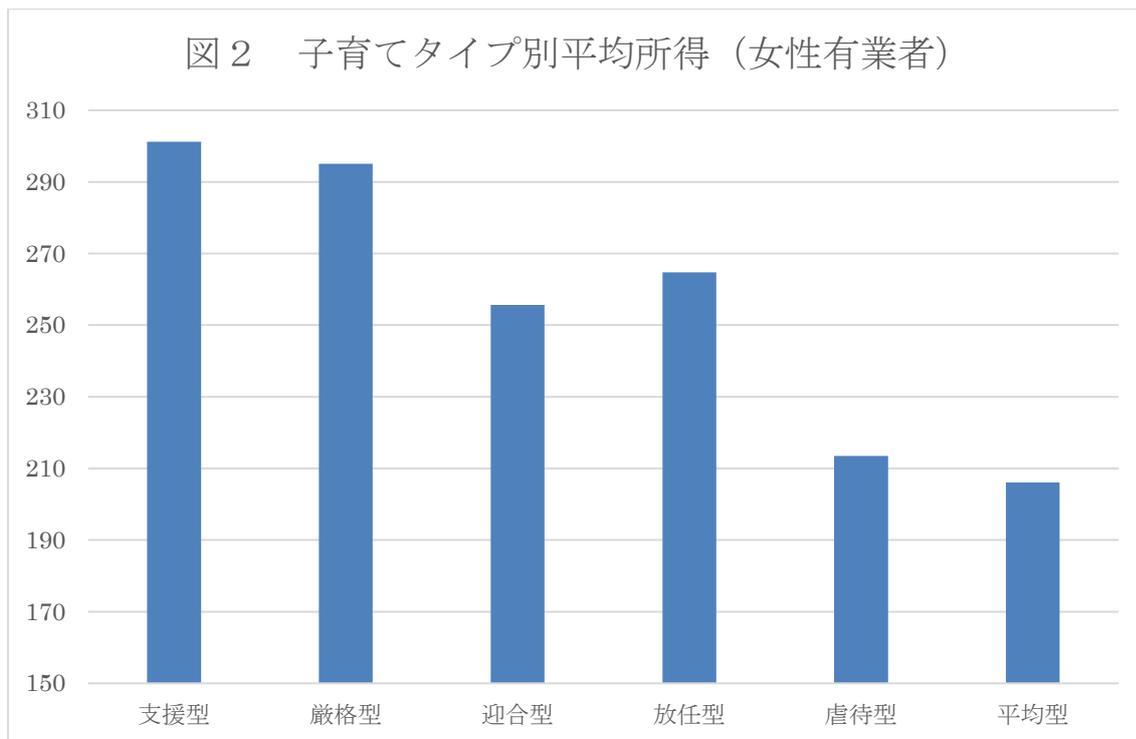


表8 女性有業者子育てタイプ別平均所得

記述統計	女性有業者			
課税前労働所得				
	人数	平均所得 (万円)	標準偏差	標準誤差
支援型	170	301.1765	240.8044	18.46886
厳格型	121	295.0413	260.0805	23.64368
迎合型	487	255.6468	210.8281	9.55353
放任型	34	264.7059	193.6607	33.21253
虐待型	37	213.5135	208.3829	34.25793
平均型	66	206.0606	141.2894	17.39153
合計	915	264.3716	220.2011	7.27962

図2 子育てタイプ別平均所得（女性有業者）



4.3 子育てタイプと幸福感

次に、回答者の親の子育てが子供である回答者の幸福感に与えた影響について、子育てタイプごとに2つの因子得点の平均値を調べることによって見ていく。まず、「前向き思考」について見ると、表9、表10、図3で示されるように、男女ともに支援型が最も高い前向き思考をもたらしており、男女とも虐待型が最も低い前向き思考を持っている。男性の場合放任型は、虐待型と同じ程度に前向き思考が低いことが示されている。

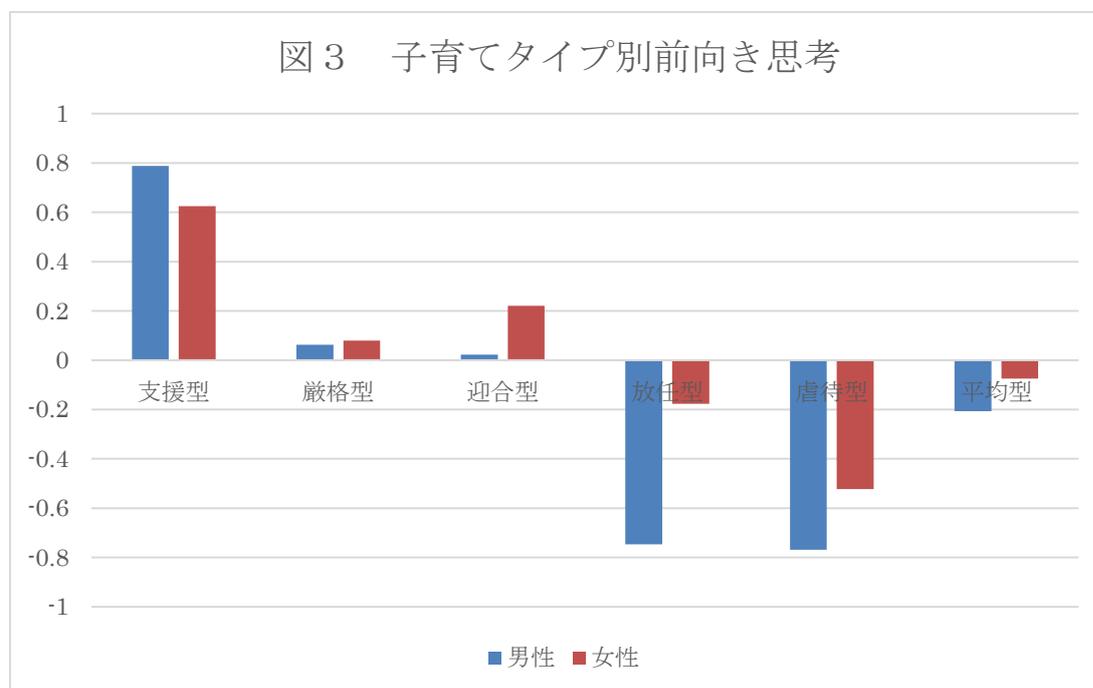
女性は、男性と同様な傾向でタイプ別差異が生じているが、男性ほど子育てのタイプによって前向き思考の差が生じていない。迎合型が比較的高い前向き思考である点は興味深い。

表9 前向き思考（男性）

	人数	平均値	標準偏差	標準誤差
支援型	143	.788	.907	.076
厳格型	114	.062	.909	.085
迎合型	578	.022	.918	.038
放任型	68	-.746	.999	.121
虐待型	36	-.769	1.091	.182
平均型	178	-.206	.729	.055
合計	1117	.016	.972	.029

表10 前向き思考（女性）

	人数	平均値	標準偏差	標準誤差
支援型	220	.624	.842	.057
厳格型	163	.080	1.084	.085
迎合型	699	.220	.839	.032
放任型	48	-.177	1.315	.190
虐待型	56	-.523	.984	.131
平均型	97	-.075	.734	.074
合計	1283	.202	.930	.026



さらに、不安感に与える影響について見る。表11、表12、図4で示されるように、男女ともに支援型が最も不安感が低く、虐待型が最も不安感が高い、そして、放任型は、虐待型に次いで不安感が高いことが示されている。

女性は、男性と同様な傾向でタイプ別差異が生じているが、男性よりも子育てのタイプによる「不安感」の差は大きい。これは、「前向き思考」では男性の方が子育てタイプによる差が大きかったのとは逆の結果である。

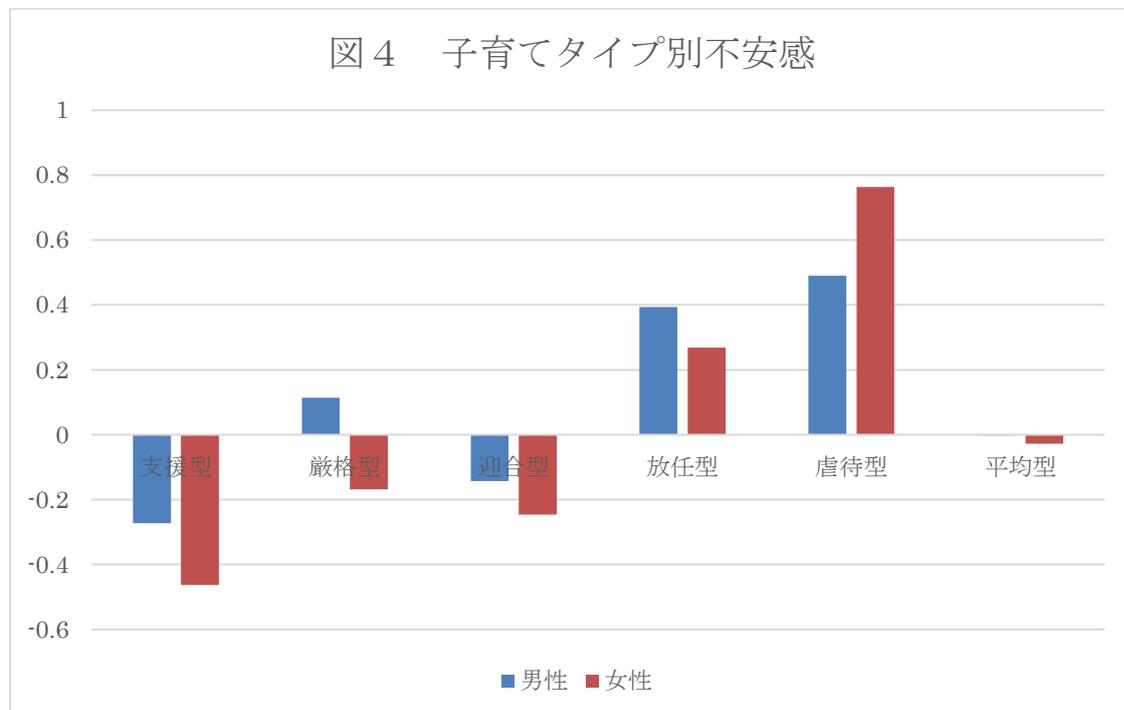
表11 不安感 (男性)

	人数	平均値	標準偏差	標準誤差
支援型	143	-0.272	0.871	0.073
厳格型	114	0.114	0.868	0.081
迎合型	578	-0.143	0.886	0.037
放任型	68	0.393	0.989	0.120
虐待型	36	0.490	1.164	0.194
平均型	178	-0.002	0.633	0.047
合計	1117	-0.058	0.882	0.026

表12 不安感 (女性)

	人数	平均値	標準偏差	標準誤差
支援型	220	-0.463	0.792	0.053
厳格型	163	-0.168	0.881	0.069
迎合型	699	-0.246	0.793	0.030
放任型	48	0.269	1.075	0.155
虐待型	56	0.763	1.155	0.154
平均型	97	-0.028	0.752	0.076
合計	1283	-0.194	0.868	0.024

図4 子育てタイプ別不安感



4.4 子育てタイプと学歴形成

次に、子育てタイプ別に学歴形成の違いを確認する。図5および図6で示されているように、男女共に支援型の高学歴者比率が最も高く、次が迎合型となっていることが示されている。厳格型は、男女共に若干、迎合型より低い高学歴比率であり、特に学歴形成に有効であるという結果は得られなかった。

最も低い高学歴形成であったのは、男性では放任型と虐待型、女性では放任型である。このように、放任型は高学歴形成という点においては好ましいとは言えない。

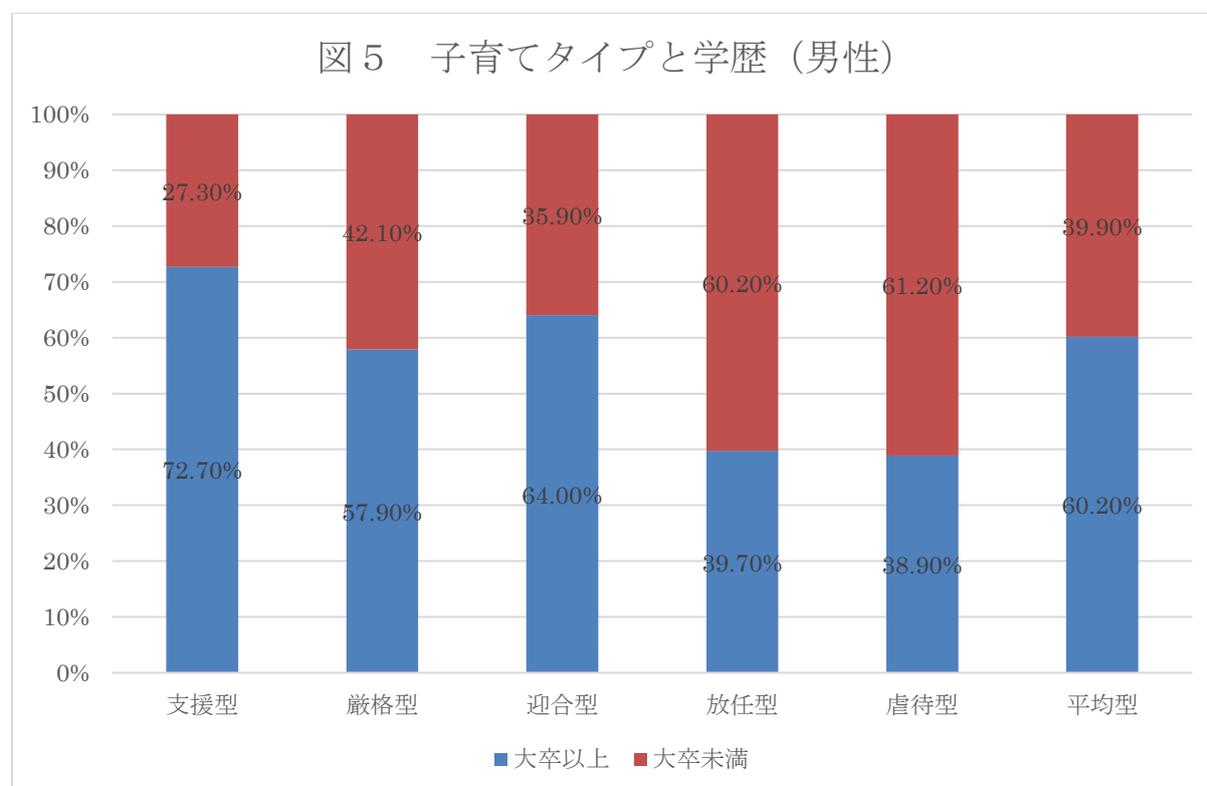
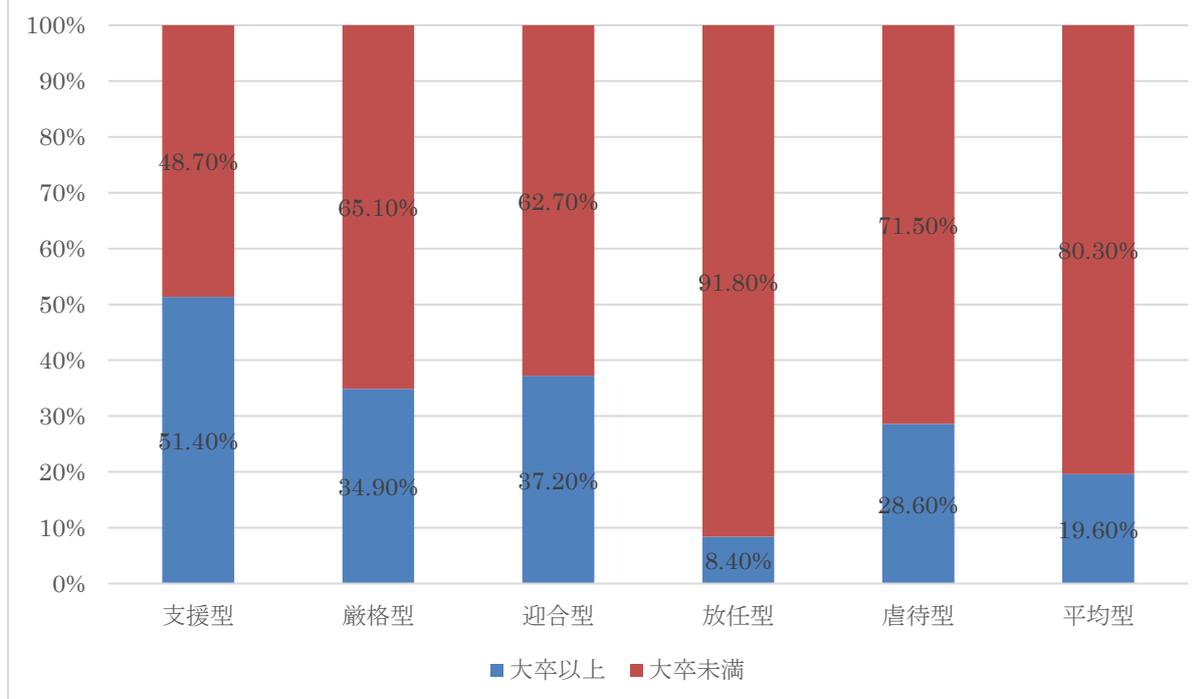


図6 子育てタイプと学歴（女性）



4.5 子育てタイプと達成度バランス

これまで、所得、前向き思考、不安感、学歴形成という項目について、子育てタイプとの関連性を見てきた。次に、これらの項目についての達成度を調べる。達成度は、各項目の平均値の最大値が25となるように線形変換し、項目間での比較が容易になるようにレーダー図によって示している。なお、不安感は、達成度の点において他の項目とは逆方向となっているため、線形変換によって安心感指標に変えてレーダー図を作成している。また、学歴については、学歴別にポイントを設定し、子育てタイプ別に平均ポイントを計算した。

図7-1と図7-2では、男性に関するレーダー図を示している。これらの図から示されるように、支援型は、すべての項目で最も高い達成度を示し、前向き思考では他よりも圧倒的に高くなっている。厳格型と迎合型は近い形状をしており、厳格型は所得で迎合型よりも高いものの、安心感では低くなっている。

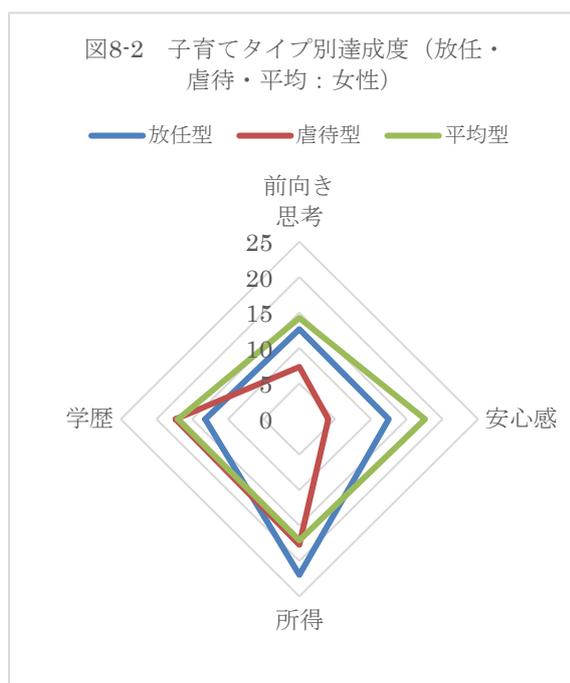
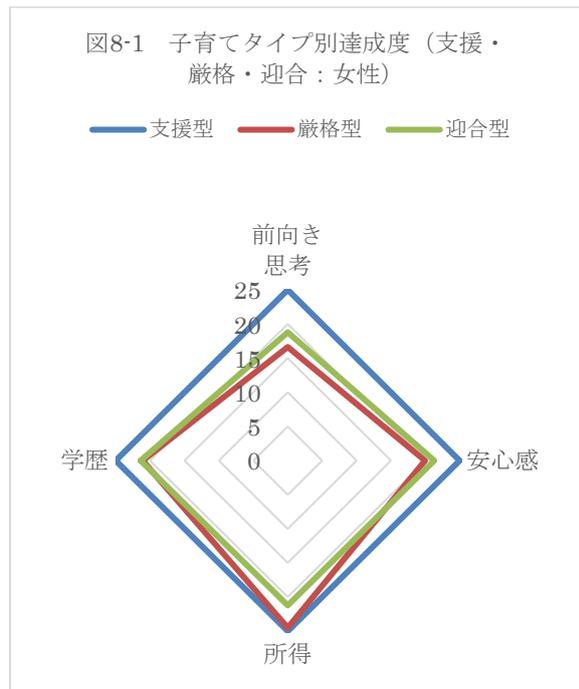
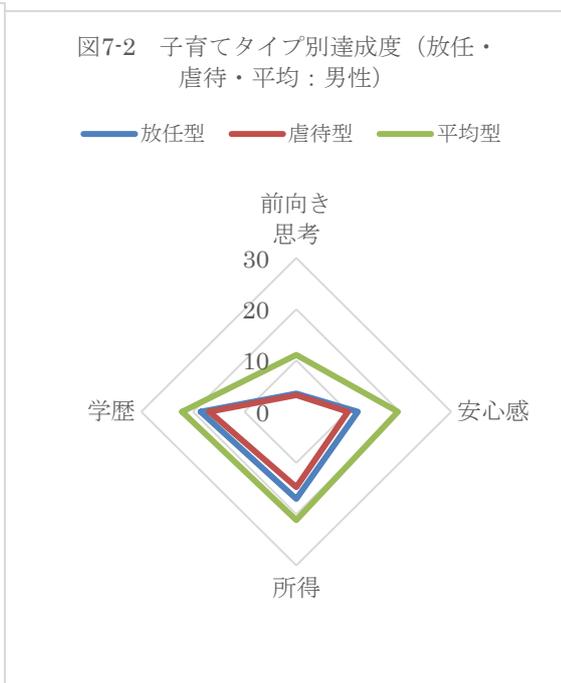
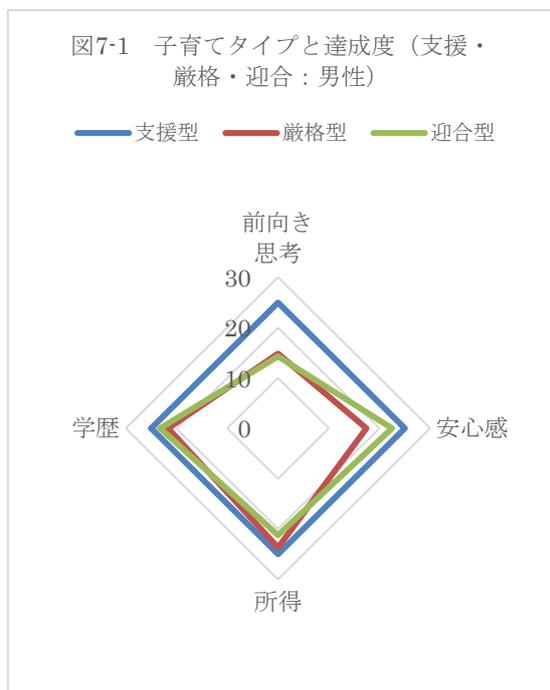
虐待型はすべての項目において最も低い達成度となっているが、放任型も虐待型と近い形状になっている点は注意する必要がある。

図8-1と図8-2では、女性に関するレーダー図を示している。女性においても、男性と同様に、支援型がすべての項目で最も高い達成度を示している。男性と同様に、厳格型と迎合型は近い形状をしており、厳格型は所得では迎合型よりも高いものの、前向き思考および安心感では低くなっている。

女性において特徴的であるのは、虐待型の前向き思考と安心感が、放任型とくらべても、大きく低くなっている点である。

尚、世代間で子育てタイプ別のパフォーマンスが異なる可能性はある。しかしながら、本分析で用いたデータでは、世代毎に得られたタイプ別標本数が、迎合型以外のタイプにおいて統

計的有意性を確認するために必要な標本数を得られなかったため、分析できていない。この点は、今後の課題として残されている。



4.6 厳格型と虐待型における専制的な母親、父親が与える効果

本調査では、「母は私が何か言うたびに、言い方を変えた」、「母は自分の話にすり替えるなどして、話を聞こうとしなかった」、「母は私の意見が自分たちの意見と違うと、否定して

きた」、「母のことを愛しているなら、母を心配させるようなことはしない」、「母は私に対して優しく接したり、批判的になったりと対応が突如変わった」という5つの質問を行っている。父親に関しても全く同一の質問を行っている。これらの回答を主因子法による因子分析にかけると、1つの因子が抽出された。この因子は、父親、母親の「専制度」と解釈することができる。因子得点を計算し、得点の第1四分位以下を低専制、第1四分位と第3四分位の間を中専制、第3四分位以上を高専制と階層分けしている。

ここでは、専制的な親は厳格型と虐待型が多いと思われるので、厳格型と虐待型に属する子育てタイプについて、専制的態度が達成度にどのような影響を与えているかについて、母親、父親別に分析する。表13および図9-1から図9-4で示されているように、父親の専制度と母親の専制度が達成度に与える影響は異なる。厳格型の所得を見ると、父親が専制的であることは、若干所得を上昇させる。しかしながら、母親が専制的であることは、所得を引き下げている。虐待型では、父親が専制的であっても所得を下げる効果は無いが、母親が専制的であると、所得を下げる効果を有していると言えよう。

前向き思考については、厳格型であれば、父親、母親共に、専制度が高い場合に低い値を与えている。虐待型では、母親の専制度の違いが、前向き思考に大きな影響を与えていることが示されている。回答者はおしなべて後向き思考であるが、母親の専制度が低い場合のみ、後向きの度合いが小さくなる。母親の専制度が高くなるにつれ、前向き思考が大きく低下する結果は注目する必要がある。

不安感については、厳格型では父親・母親共に同様な傾向を示しており、より専制的になるにつれて不安感も増大している。虐待型では、おしなべて不安感が強いが、父親・母親の専制度が高い場合に、不安感が強まっていることが示される。

大卒以上学歴比率については、厳格型の父親に関しては専制度との関連性ははっきり見て取ることができないが、母親の専制度が低い場合には大卒以上学歴比率が上昇している。虐待型に関しては、父親の専制度が低い場合に大卒以上学歴比率が高くなっている。母親の専制度は、大卒以上学歴比率に影響を与えていない。

以上の結果より、母親の専制度が低いことは、厳格型および虐待型において、達成度に対して正の効果を有していることが理解できる。

表 13 厳格型、虐待型別 父親・母親専制度別達成度（男女計）

	専制度合	厳格型父親	厳格型母親	虐待型父親	虐待型母親
課税前労働所得（万円）	低専制	386.57	350.65	170.00	300.00
	中専制	387.62	334.04	257.89	150.00
	高専制	405.45	250.85	184.13	201.47
前向き思考	低専制	0.25	0.08	-0.75	-0.04
	中専制	0.03	0.15	-0.39	-0.58
	高専制	-0.06	-0.12	-0.67	-0.68
不安感	低専制	-0.22	-0.21	0.45	0.28
	中専制	-0.03	-0.08	0.78	0.84
	高専制	0.11	0.22	0.65	0.64
大卒以上比率	低専制	0.51	0.49	0.50	0.33
	中専制	0.38	0.43	0.26	0.28
	高専制	0.49	0.42	0.32	0.34

図9-1 厳格型タイプ・虐待型タイプ 父親・母親専制度別所得
(有業者)

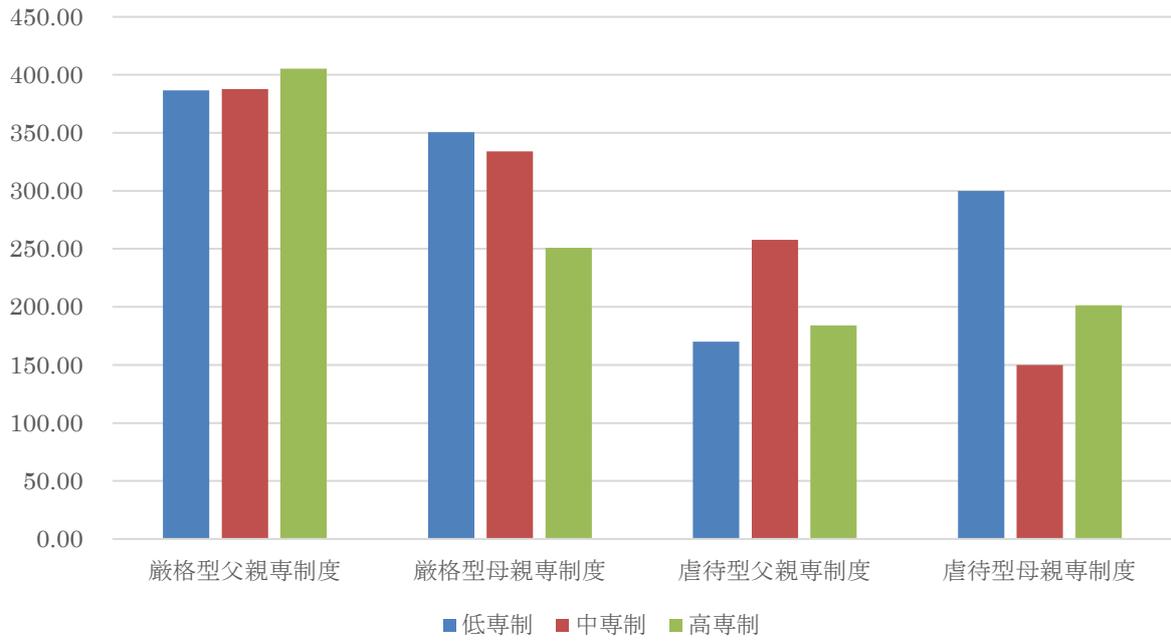


図9-2 厳格型・虐待型タイプ 父親・母親専制度別前向き思考



図9-3 厳格型・虐待型タイプ 父親・母親専制度別不安感

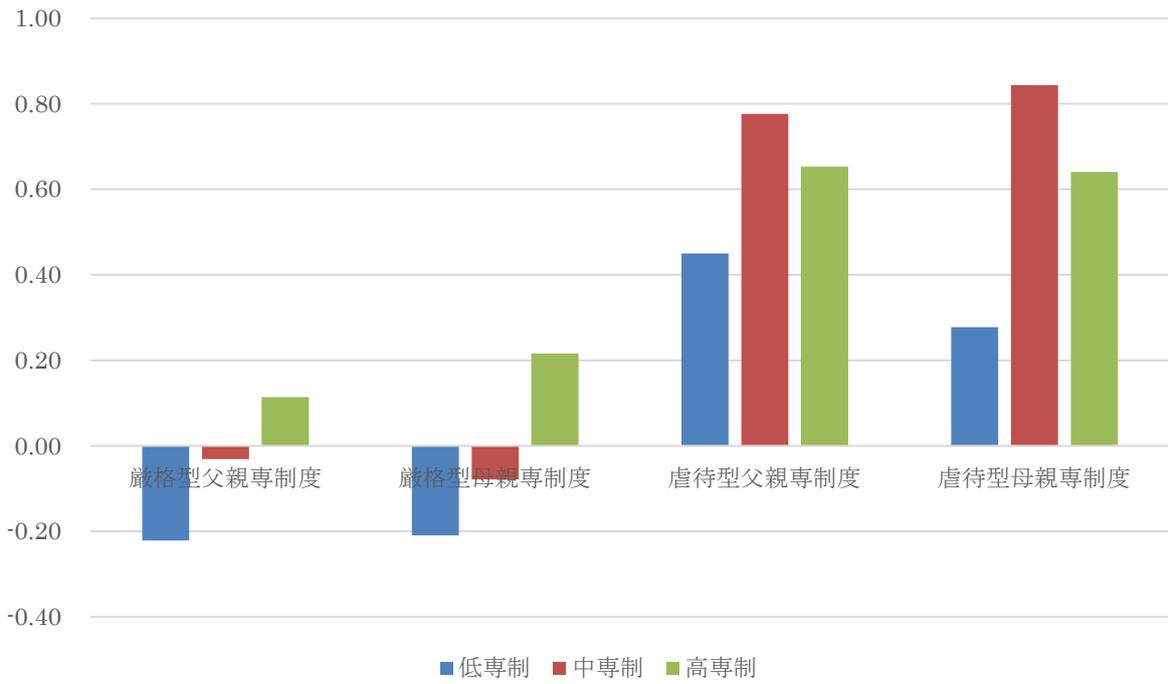
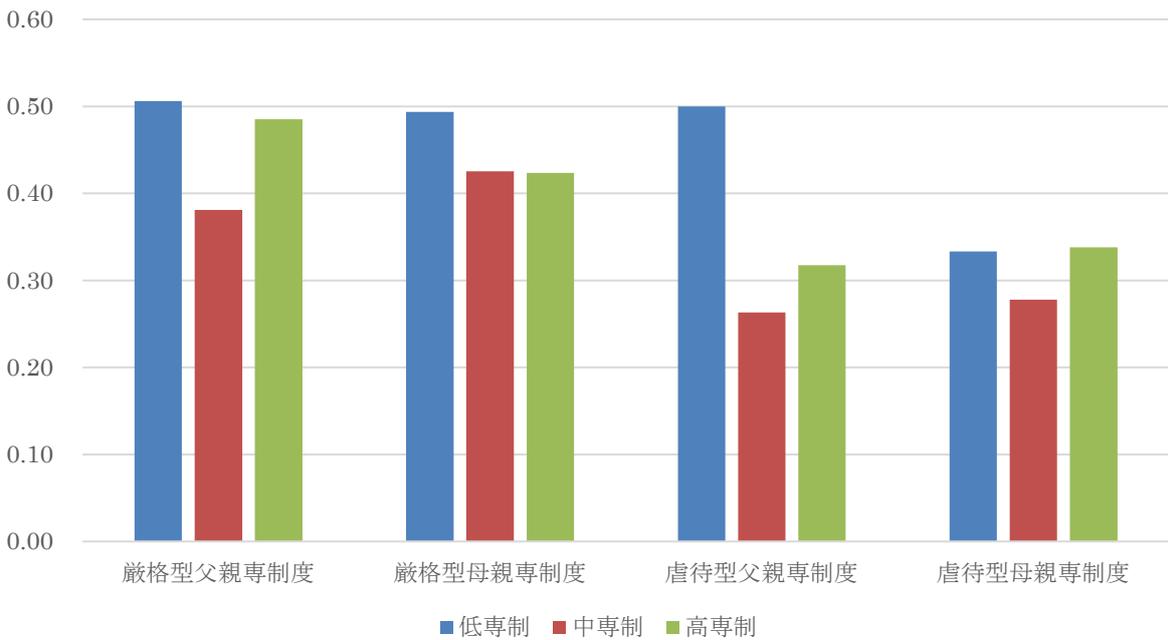


図9-4 厳格型・虐待型タイプ 父親・母親専制度別 大卒以上学歴比率



5. 子育てタイプと倫理観

次に、対象者の親の子育てが子供である対象者の倫理観に与えた影響について、子育てタイプごとに調べる。経済社会における効率性が労働者の倫理観にも依存していることを考えれば、倫理観の形成がどのようにしてなされるかを分析することは、重要な意味を持つことになる。

本稿では、倫理や規範に対する対象者の考え方の違いを把握するために、表13で示されている質問を設定し、回答を得た。主因子法による因子分析を行った結果、「順法意識」、「非社会性（社会性）」、「扶養意識」、「打算的」といった因子を抽出している。

表13 倫理規範に関する回答に対する因子分析結果

	順法意識	非社会性 (社会性)	扶養意識	打算的
脱税行為は許されない	0.636	0.051	-0.056	-0.118
不正を発見すれば、速やかに通告すべきである	0.588	-0.04	-0.039	0.009
教師は生徒に対して公平であるべきである	0.57	0.057	0.053	-0.104
酒を飲んだら絶対に運転してはいけない	0.533	-0.01	-0.002	0.101
お世話になる人への謝礼は当然である	0.488	-0.115	0.063	0.237
法令順守はどんな場合でも最優先される	0.469	0.006	0.047	-0.046
公共の場での喫煙は許されない	0.468	-0.001	-0.054	0.086
自分や家族のことをまず第一に考えるべきである	0.466	0.191	0.15	-0.026
急いでいる場合は、行列の途中で割り込んでよい	-0.423	0.082	0.192	0.159
面倒事にはなるべく関わりたくない	0.277	0.55	-0.045	0.059
ライバルが困っていても手を差し伸べようとは思わない	-0.089	0.503	0.011	0.119
年離れた親の面倒は子どもが見るべきである	0.365	-0.151	0.523	0.065
老後は子どもの世話になりたい	-0.111	0.062	0.504	0.083
便宜を図ってもらうためには、相応の対価を負担すべきである	0.051	0.112	0.045	0.491
政治家が利権や不正な資金を入手するのはやむを得ない	-0.383	0.101	0.156	0.481

図9から図12では、倫理規範に関する各因子について計算した子育てタイプ別の平均値を示している。図9では、ここでいう順法性とはルール順守に関する倫理であり、「酒を飲んだら絶対に運転してはいけない」などの判断に関わるものである。支援タイプは男女ともに最も高い順法的倫理観を示しており、放任型は男女ともに順法的倫理観が最も低くなっている。

図10では非社会性の子育てタイプ別の因子得点の平均値を示している。ここでの非社会性とは、「面倒事にはなるべく関わりたくない」などという考え方である。支援型は男女とも非社

会性が最も低く、虐待型は非社会性が最も高いことが示されている。次いで放任型の非社会性が高くなっている。

図11では、扶養意識に関する倫理観の子育てタイプ別因子得点の平均値を示している。ここでいう扶養意識の倫理観とは「年老いた親の面倒は子どもが見るべきである」、「老後は子供の世話にならない」という考え方である。支援型は男女とも最も高い値を示しており、虐待型は男女とも最も低い値を示している。放任型も男女とも低い値を示している。

図12では、打算に対する倫理観について子育てタイプ別平均値を示している。ここで測る倫理観は、「便宜を図ってもらうためには、相応の対価を負担すべきである」、「政治家が利権や不正な資金を入手するのはやむを得ない」という、収賄を認めるのに近い打算的考え方である。支援型は男女とも最も収賄に対して否定的な倫理観を示しており、女子の平均型も支援型と同等の否定的倫理観を示している。男性については放任型が最も収賄を許容する倫理観を持ち、女性については厳格型が最も収賄を許容する倫理観を持っていることが示されている。

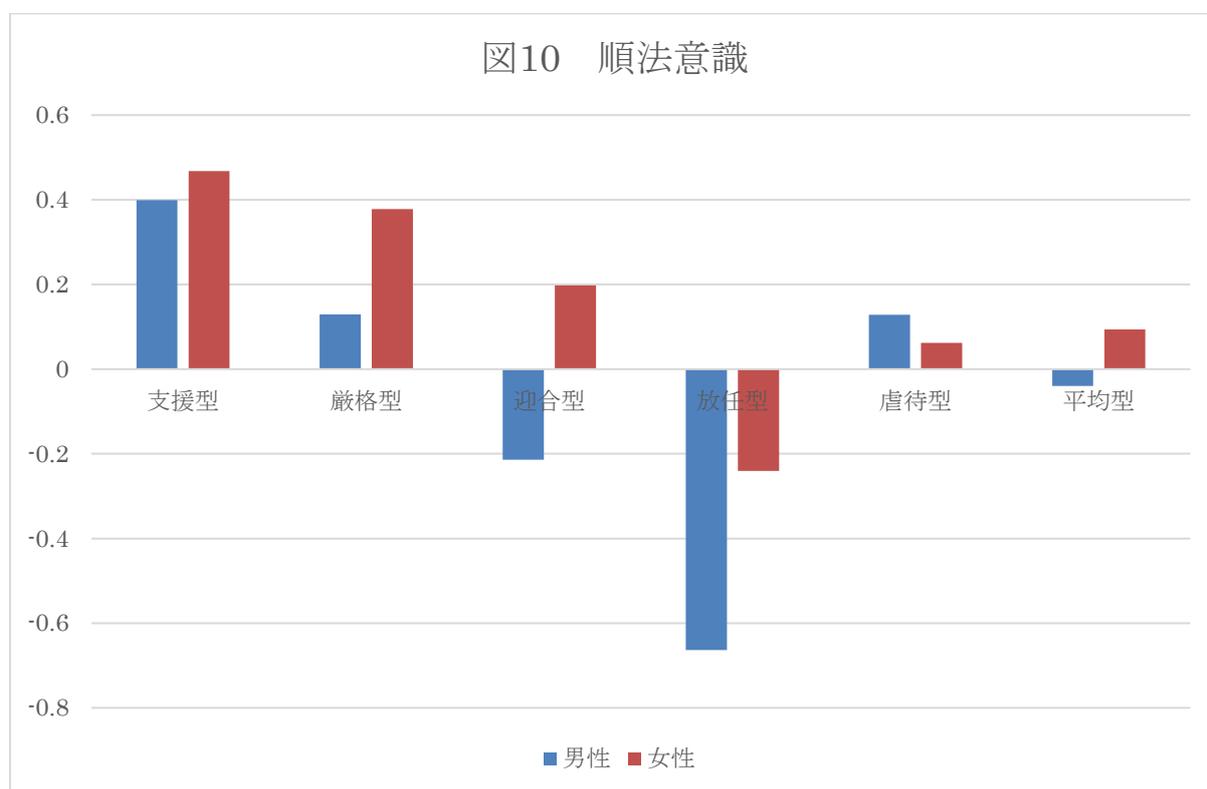


图11 非社会性

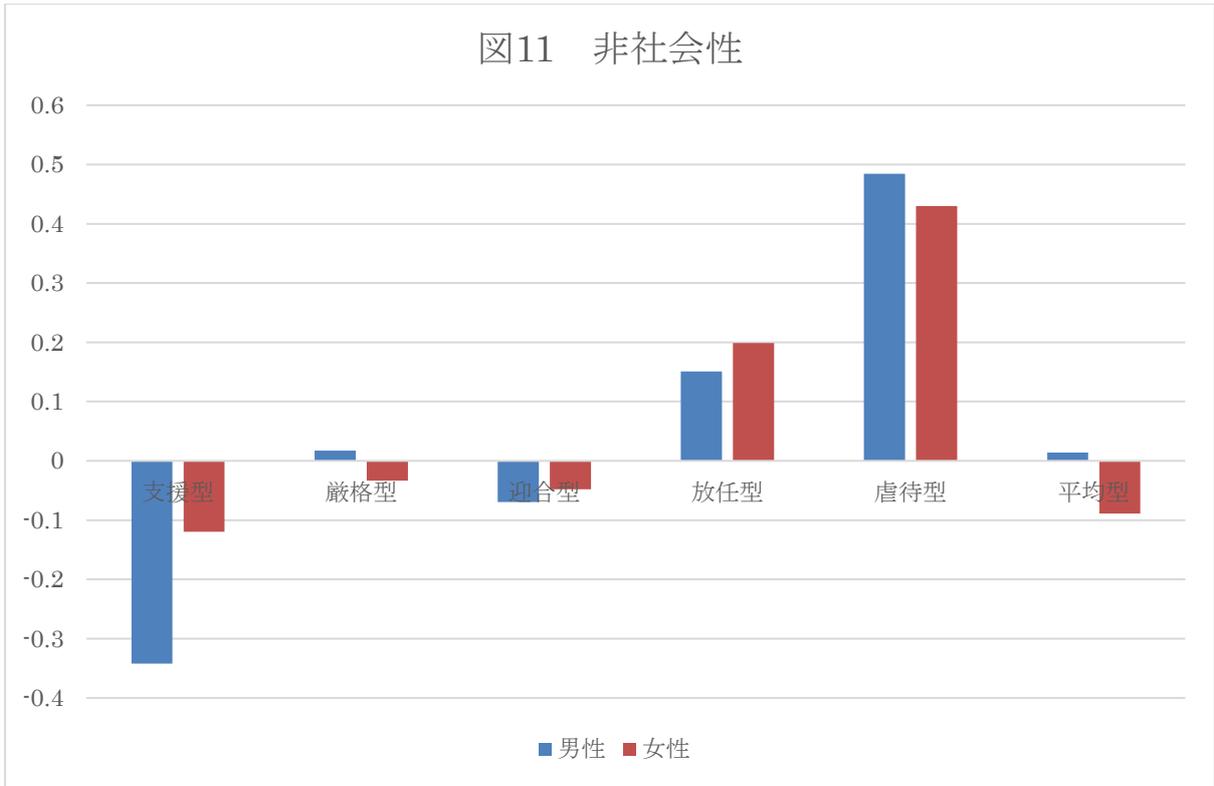


图12 扶養意識

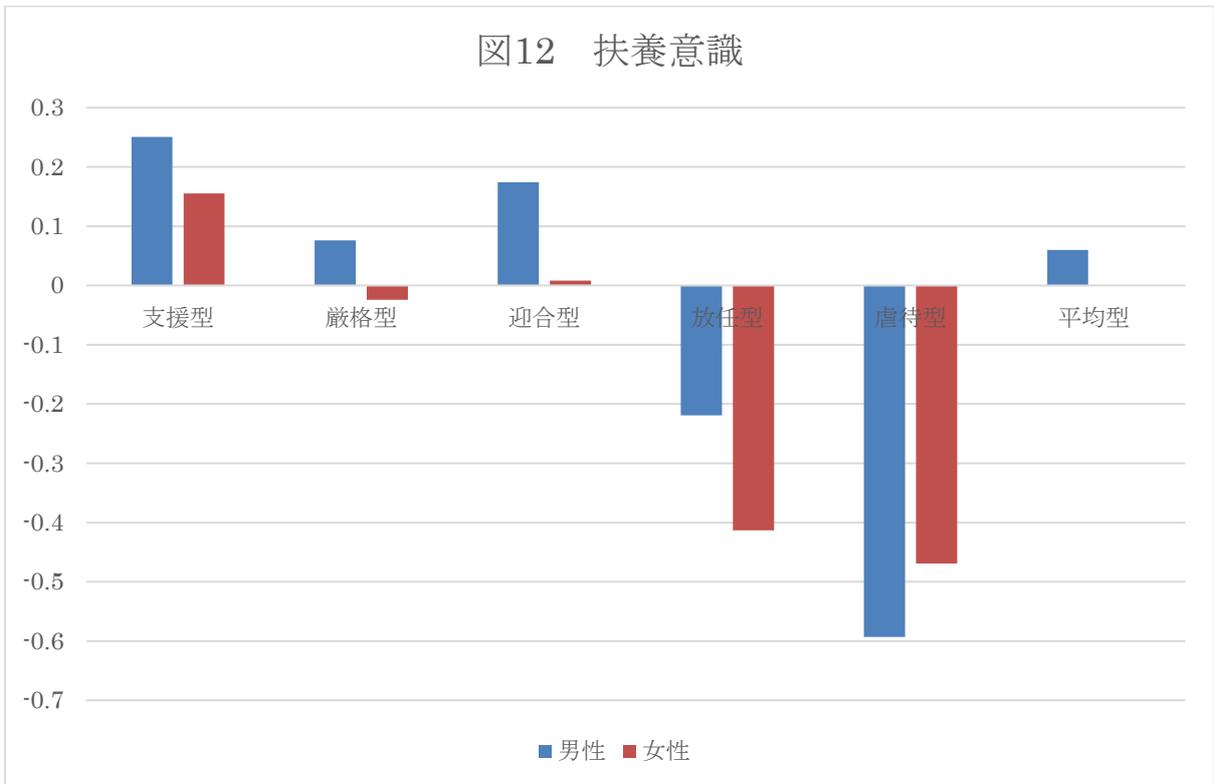
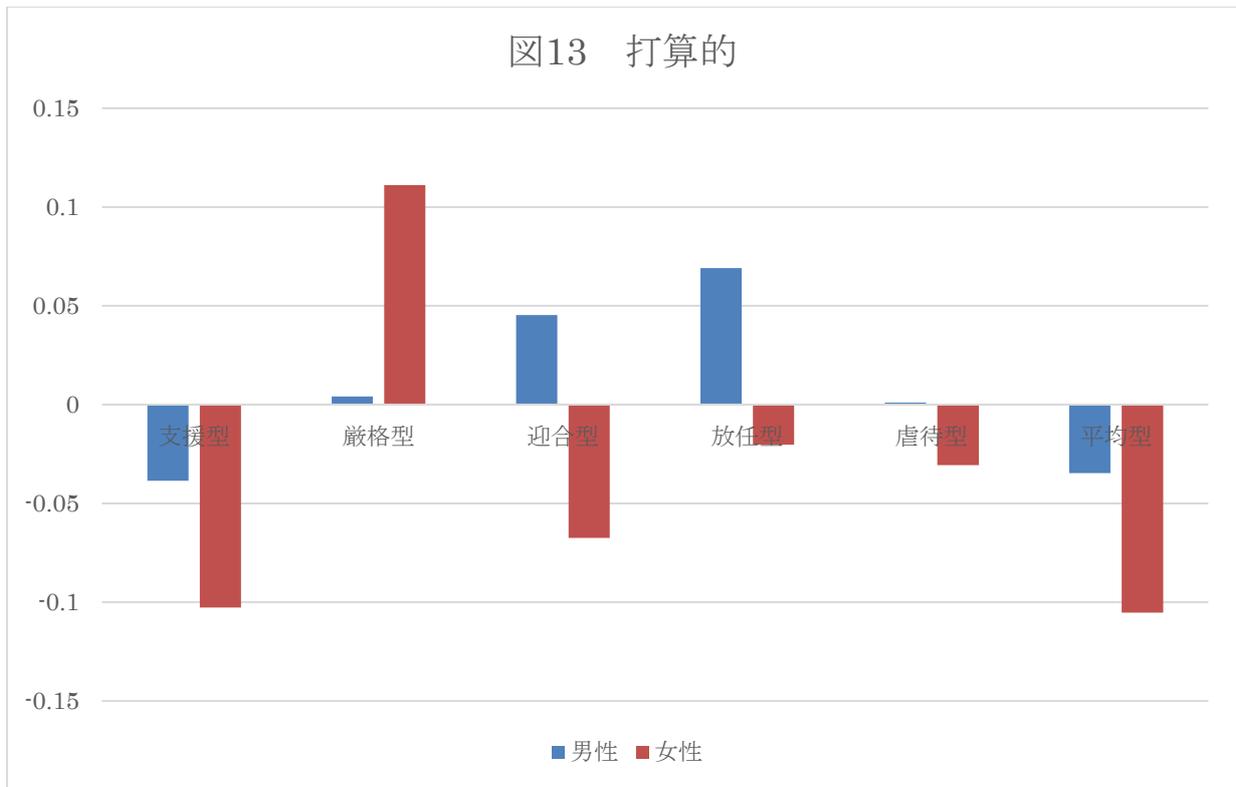


図13 打算的



6. おわりに

我々は、関心、信頼、規範、自立の程度をもとにして、それに、時間共有、厳しさの指標を加えた上で、子育ての方法を、支援型、厳格型（タイガー）、迎合型、放任型、虐待型、平均型に分類し、それぞれの子育てを受けたグループの平均所得、前向き思考、安心感、学歴を比較した。6つの子育てタイプのなかでは、支援型が所得、前向き思考、安心感、学歴いずれにおいても最も高い達成度を示しており、虐待型はすべてにおいて最も低い達成度となっている。倫理観についても子育てタイプ別に比較を行ったが、あらゆる点で支援型は望ましい結果を示している。

これらの結果は、子育てを行う場合には、常に子どもを見守りながら、親子間での信頼を形成し、親子で共に時間を共有しながら、自立を促すことが重要であることを示している。支援型の子育てを一言でいうなら、「関心をもって見守る」ことであろう。

参考文献

- Barber, K. Brian (1996), "Parental Psychological Control: Revisiting a Neglected Construct" *Child Development*, Vol. 67, No. 6, 3296-3319.
- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75(1), 43-88.
- Baumrind, D. (1968). Authoritarian vs. authoritative parental control. *Adolescence*, 3, 255-272.
- Chua, A. (2011), *Battle hymn of the tiger mother*, New York, NY: Penguin Press.
- Fulgini, V. T. J. Andrew and May L Source (1999), "Attitudes toward Family Obligations among American Adolescents with Asian, Latin American, and European Backgrounds" *Child Development*, Vol. 70, No. 4 (Jul. - Aug., 1999), 1030-1044.
- Ge, Xiaojia, Karin M. Best, Rand D. Conger and Ronald L. Simons (1996), "Parenting Behaviors and the Occurrence and Co-Occurrence of Adolescent Depressive Symptoms and Conduct Problems", *Developmental Psychology* Vol. 32, No. 4, 717-731.
- Hills, P. and Michael A. (2002), "The Oxford happiness questionnaire: a compact scale for the measurement of psychological well-being," *Personality and Individual Differences* 33, 1073-1082.
- Kim, Su Yeong, Yijie Wang, Diana Orozco-Lapray, Yishan Shen, and Mohammed Murtuza (2013), "Does 'Tiger Parenting' Exist? Parenting Profiles of Chinese Americans and Adolescent Developmental Outcomes," *Asian American Journal of Psychology*, Vol. 4, No. 1, 7-18.
- Maccoby, E. E., & Martin, J. A. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In P. Mussen (Ed.) *Handbook of Child Psychology* Vol.4. New York: Wiley
- Zak, P.J. (2012) *The Moral Molecule: The Source of Love and Prosperity*, Dutton Adult, New York
- 西村和雄・平田純一・八木匡・浦坂純子 (2014) 「基本的モラルと社会的成功」、『RIETI Discussion Paper Series』、RIETI独立行政法人経済産業研究所, (<http://www.rieti.go.jp/jp/>).